



Title	映画『狂宴』にみるおんなたちの声：奈良RRセンタ 一周辺の場合
Author(s)	茶園, 敏美
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1999, 33, p. 49-64
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56450">https://hdl.handle.net/11094/56450</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 映画『狂宴』にみるおんなたちの声

— 奈良RRセンター周辺の場合 —

茶 園 敏 美

## 0. はじめに

1952（昭和27）年5月1日に、奈良市横領町にRRセンター（Rest & Recreation Center<sup>1)</sup>）が大阪市の住友ビルから移転してきた。RRセンターとは朝鮮戦争時に駐留米兵たちの「休養と快復<sup>ママ</sup>を与える施設<sup>2)</sup>」の略称である。RRセンターの収容能力は500人ほどで、兵士たちは5日間の休暇をもらい伊丹飛行場から自動車<sup>ママ</sup>でRRセンターへ来るが、その数は毎日平均150名程であり、5日間滞在のべ常時700～800名の米兵が宿泊している。米兵ひとり当たり10万から20万円程度の金が支給されているので、5日間で最低7500万円が奈良を中心に京阪神一帯の帰休兵に接するものにおちる<sup>3)</sup>。そして翌年の9月15日には、奈良の2～3倍の収容能力で2～3,000名収容できる神戸へとRRセンターは移転していった<sup>4)</sup>。

移転した翌年の1954（昭和29）年4月7日に、北星映画配給、春秋プロ作品の映画『狂宴』が完成した。この映画は奈良を舞台に、RRセンター街に生活するひとびとを描いた80分フィルムの白黒作品である。映画が撮影されたのは、すでにRRセンターが神戸に移転したあとのことであり<sup>5)</sup>、平城京趾に突然「西部の街」が出現したことによって「米兵ブーム」に翻弄される村のひとびとの様子が描かれている。

『狂宴』の副題は「古都とアメリカ兵」とあるように、その制作意図は「古都と基地、アメリカ兵と日本の農民、その奇妙な取合わせのなかに、

現代日本がかかえた問題を容赦なく追求<sup>6)</sup>」するというもので、当時日本本土が抱えていた基地被害の実話をおりこんだドキュメンタリー風の作品である。古都奈良という場で引き起こされる基地反対者と賛成者の分断をベースに、映画では米兵のレイプ問題や「パンパン」の格好を模倣する高校生に焦点があてられ、いずれも基地被害の「犠牲者」として描かれている。この映画の制作意図どおりに、米軍基地に翻弄されるひとびとの姿を見出すことは容易であろう。

しかしながら本稿では、基地被害の「犠牲者」として描かれているおんなたちを『狂宴』にそくして再検討することで、映画制作者の意図を越えて浮上してくることを明らかにしてみたい。奈良にRRセンターが移転し「パンパン」と呼ばれた接客婦たちが村の新たな労働力として参入することによって、村ではどのようなことがおこったのだろうか。古都奈良という個別具体的な場で展開された米軍基地問題を、映像そのものが伝えているメッセージを読み直す作業からはじめたい。

## 1. 米二郎と亀造 ― 分断される農民たち

これまで平穏無事な古都奈良にRRセンターが突然できることによって、付近の農民たちが基地賛成派と反対派に分かれ基地被害にまきこまれていく様子を、映画はある2組の農家の家庭を対比させることによって展開していく。飛鳥米二郎夫妻はいちはやくキャバレーおよび「パンパン」宿を始めた賛成派で、時流にのって「安保さまさま」「米兵さまさま」と大儲けをする。他方、その隣に住んでいる従弟の飛鳥亀造夫妻は反対派で、無言で農業にいそむことで抵抗を示している。2組の家庭にはそれぞれ高校生の娘がいたが、彼女たちの性格も対照的である。ある日事件がおきた。米二郎の娘和子が親に内緒で修学旅行に行かず米兵に抱かれた夜、亀造の娘房子も修学旅行先で米兵に暴行されてしまうのだ。その日以来、房子は

学校へ行かず家に閉じこもっている。亀造一家はどうすることもできずに黙々と農業に励んでいるが、米二郎の店は以前より繁盛する。そんななか、房子は近くの池に投身自殺してしまう。古都奈良のジャズが響きわたる「西部の街」で、米二郎の自家用車を先頭に房子の葬列がとおっていく。そのころ亀造は村の通りにひれ伏し、大地をたたき号泣しながら房子の死を悲しんでいた。

映画『狂宴』の制作スタッフは、『日本戦歿学生の手記 きけ、わだつみの声』（東横）で知られる関川秀雄監督<sup>7)</sup>、制作が在日朝鮮人1世の具快萬、脚本が片岡薫<sup>8)</sup>、といった顔ぶれである。片岡氏は『狂宴』の1年前に、『混血児』という映画の脚本を執筆している。『混血児』は大磯のエリザベス・サンダース・ホームに集まっている、米兵と日本女性の間にできたこどもたちを描いたもので、片岡氏は『混血児』の取材中から米軍基地の問題をとりあげようと考えていたという<sup>9)</sup>。片岡氏は『狂宴』を執筆するにあたり、日本本土の700を越える米軍基地から代表的なところを取材することからはじめた。奈良を映画の舞台に選んだ理由として、「平城京の昔を偲<sup>ママ</sup>ばせる淳朴な農村に、時ならぬ原色の『西部の町』が現出していた。女が、ポンビキが集まり、納屋がハウスに、土間がバーに変わった。そして人の心も変って行く。私は、ここをドラマの場にした。米軍基地が日本と日本人をどう変えて行くかを、内側からじっくり見てみようと思った<sup>10)</sup>」と述べている。『狂宴』はロケで撮影反対の地元側に撮影を妨害され警官が出動するというハプニングにみまわれたが<sup>11)</sup>、この撮影妨害はどうして起きたのだろうか。

『奈良日日新聞』が1954（昭和28）年1月18日から1月24日まで不定期に6回連載されたRRセンター廃止期成同盟会（注一これ以降、廃止期成同盟会と表記する）報告の「R・Rセンター白書」では、1952（昭和27）年末はセンター前にはキャバレー2軒、レストラン10軒、カフェー16軒、

カメラや土産物を売るギフトショップ24軒が軒をつらね、さらに新築工事がおこなわれると報告している。すなわちこの当時ですでに52軒もの店が、RRセンターめざしてくる米兵めあてに建てられたのである。経営者はキャバレー、カフェー、レストラン各1軒が台湾系人で営まれているほかはすべて日本人であり、そのほとんどが他府県人（大阪府が多い）でRRセンターの移転にあわせて巡るひとびとだという。しかしながら、これらの店を造る直接の労働力として供給されたのが「村の青年たち」であり、「そこに働く田舎のおつさん」たちであった。

さらに1953（昭和28）年5月28日付『奈良日日新聞』の、「…農民達までが、営々として働くことを忘れ土地を貸して甘い汁を吸うトンデモない空気を覚えさせることを最も恐れるものである。地主の甘言に乗せられず時にして金になるので小作人達も簡単に妥協している現状には看過し難いものがある」という記事から、RRセンターが出現したことによって、多くのひとびとが自らの労働力と引き換えに簡単に大金を手にするチャンスがころがっていたことがうかがえよう。とするならば、RRセンターが閉鎖されることによってたちまち生活に困るのが、当の村人たちである。田畑を業者に売り渡してこれまでの生活様式をがらりと変えたもの、農業をやめて店を始めたもの、あるいは店員になったものにとって、RRセンター閉鎖は自分達の死活に直結する問題となった。そうしたひとびとにとって廃止期成同盟会の制作協力による『狂宴』への撮影妨害は、生活を死守するための必死の「抵抗」だったのである。

RRセンター周辺にはこのように、それを「歓迎」するひとびともいれば、「反対」するひとびともいた。1952（昭和27）年9月3日に廃止期成同盟会が結成され、地評、国鉄労組、ユネスコ協力会、婦人団体、宗教団体など37団体が参加した<sup>12)</sup>。RRセンター存続を求めるRRセンター前尼ヶ辻商店街組合が1万名以上の移転反対署名運動を展開する一方で<sup>13)</sup>、

廃止期成同盟会は結成後3ヶ月足らずでRRセンター調査委員会を結成し、その調査結果を同会委員松井喜三氏（当時国鉄労組奈良支部事務局長）の手で「R・Rセンター白書」としてまとめ、奈良市民にあててすぐ後にみるように、RRセンター廃止の参加を呼びかけている<sup>14)</sup>。このようにRRセンターの存在は、センターをとりまく住民たちをセンター存続派と廃止派の2つに分断してしまい、この争いはRRセンターが移転するまで続いたのである。

『狂宴』では、キャバレーを拡張しようと隣に住む従弟の亀造の土地をなんとか手にいれようとする米二郎と、米二郎の申し出に耳をかさず農業に固執することによって先祖伝来の土地を守ろうとする亀造。『狂宴』はセンター存続派と廃止派の確執を、この両者に体現させたといえよう。ただ、米二郎の娘和子と亀造の娘房子といった性格も生き方も違う対照的な高校生を登場させることにより、『狂宴』は駐留米軍の問題のみならず、当時の農村という村社会や家制度がかかえる問題までも露呈してしまうのである。

## 2. 隠されたレイプ ― 和子の自己主張

『狂宴』では米二郎の娘和子と亀造の娘房子も、対極の高校生として描かれている。和子は流行の服に身を包み化粧をして、米軍キャンプに勤める日本人をボーイフレンドにもち、おしゃれを謳歌する奔放なおんなである。学校がえりにボーイフレンド健の運転するジープで家まで送ってもらったり、深夜遅く帰宅する。キャバレーで何人もの若いおんなたちを従業員として雇っている母の佐乃はそんな和子のことが心配で、夫の米二郎に和子を学校の近くへ下宿させようと提案する。また米二郎は、和子が従業員ローズの部屋で酔っ払いの米兵とじゃれ合っているのを発見するやいなや、あわてて米兵に「ノーパンパン！ノーパンパン！オフリミット！オフ

リミット！」と米兵を部屋から追い出し、和子には「こんなところにおったらあかんで。」とたしなめる。

ここで廃止期成同盟会などが行なったRRセンター廃止の主張として、「生徒の受ける影響も大きく、パンパンハウス、などしている家庭の生徒では成績が低下し、長欠児童が多くなつた<sup>15)</sup>」、「相当にセンター前のフン囲キがにごり女性の純潔がみだされていることは否定出来ない<sup>16)</sup>」など、センター周辺環境が子どもたちにいかに悪影響を及ぼしているかをくりかえし強調している。

金儲けに余念のない和子の両親も、和子が従業員のおんなたちの「悪影響」を受けないようにと、和子をセンターから遠い場所に下宿をさせるが、両親の心配をよそに親元から離れた和子はますます奔放になっていく。修学旅行用にと佐乃が用意したワンピースを身につけて、和子は修学旅行へは行かずに健とのデートを優先させる。健とジャズコンサートへ行き、その後バーで将校とダンスを踊り、将校と一夜を共にする。こうした和子のふるまいから、和子は両親が経営するキャバレーに出入りしているおんなたちに少なからず影響を受けていることがうかがえる。もっといえば和子は廃止期成同盟会からみれば、「悪影響」の典型であり「基地被害の犠牲者」であるといえるかもしれない。だがこんな和子の一連のふるまいを、今一度丁寧に追ってみたい。

まず和子が影響を受けたとされる「パンパン」の状況を、「R・Rセンター白書」から拾ってみよう。当時、奈良には1000名余りの「パンパン」が存在した。そのうちの2割が未亡人であり、そのほかに自己の肉体を売って貧困のどん底にあえぐ一家を支えているものもいれば、中流以上の家庭のおんなたちが好奇心から「パンパン」になったものもある。

駐留軍を顧客とする奈良市内各種業者が結集して結成した奈良駐留軍サービス協会に登録されているものは、350名くらいいる。奈良駐留軍サー

ビス協会は、「休養兵の安全と利益を図るために不正価格などを防止するクーポン券の発行、また休養兵が希望する一切のものに応ずる<sup>17)</sup>」協会として、RRセンター前に1952（昭和27）年8月20日にオープンした。それは5月に奈良にセンターが移転してから4カ月足らずのことだった。そして登録されている「パンパン」たちには身分証明書とバッジを発行して、県立病院で週1回の性病検査が義務づけられた。

「パンパン」たちの月収は平均25,000円。内訳は、キャバレーからもらうドリンク代（飲食費の前金）が3,000円で、残りは米兵との取引でかせぐ。生活費は月約20,000円。そのほとんどが洋服代となる。というのも1日3回更衣するからで、美しく新しいものを着用しなければ兵士が相手にしてくれないという。

このように「パンパン」たちの生活は決して楽ではない。ただ、これまで静かな村に「西部の街」ができ、大勢の米兵が流入してきたため村の雰囲気は一転したのである。廃止期成同盟会委員の松井喜三氏は、「ぼくのか夜の女に転落し、最近では自宅へ兵士を連れて帰る。さらにその母はこのごろ『うちの娘はよく金をもうけるのでいゝわー』と喜んで平気である」と報告している。また、RRセンターに一番近い小学校に通う児童の作文には、「某さんが大きくなつてパンパンになれとお母さんにいわれた。それで英語を一生けんめい勉強している（小学3年生）」、「私も大きくなつたらパンパンになりたい。きれいな着物をきて、上等のくつをはいて自動車に乗つて楽しそうだからー（小学2年生）」とあり、こうした内容からも米兵相手の「パンパン」たちの存在が村のおんなたち、こどもたちの目に華やかに映ったことは想像に難くない<sup>18)</sup>。

さらにRRセンターが奈良に移転してから、付近の子どもたちが、「パンパンごっこ」、「キャバレーごっこ」をして遊んでいると報じられているが<sup>19)</sup>、



『狂宴』でもうひとつ見逃せないのは、和子のすぐしたの弟、良吉の存在である。良吉はくつみがきの少年たちと共にキャンプ内のビールの空き瓶を集めて業者に売り、その金でパンチンコ屋で遊ぶ。小学校ではスカートめくりをしたり、家に帰れば離れで米兵と従業員が抱き合っているところを覗いて笑う。母親にもらった弟の金を巻き上げたり、店で使用している麻葉を持ち出しとうとう警察につかまってしまう。良吉のこんなふるまいも『狂宴』では、「子供達の不良化<sup>20)</sup>」という部分を描いていることは容易にみてとれる。母の佐乃は警察に呼び出されて良吉と対面するが、良吉がポンを店からくすねて売りつけていたとは信じられず、誰かにもらったものだと言った良吉にも自分自身にもいいきかせるのである。このときの佐乃のまなざしは、キャバレーの共同経営者としてのまなざしではなく、元農家の長男、すなわち一家の後継ぎをみる母のまなざしがある。

映画では、古都奈良の文化財保護を強調し子どもへの悪影響を心配する住職の論に米二郎は平和条約を読み上げることで反論する。だが米二郎や佐乃が米兵相手のキャバレーを繁盛させればさせるほど、それは村社会から逸脱してしまう行為となる。そこで米二郎や佐乃は基地反対派に反論しつつも、和子や良吉を村の基準にみあった「普通の」娘や息子として扱おうとする。米二郎や佐乃が村社会から結果的に逸脱する行為をしようとも、娘や息子を村共同体の「普通の子」として育てることで、村社会から逸脱したくないのである。と同時に、「うちの子にかぎって」という佐乃の思いの中に、わが子を店に出入りしている「パンパン」や「ポンビキ」とは区別する気持ちがあるということも見落としてはならない。だが、和子や良吉は親の期待を裏切っていく。

そもそも和子が修学旅行をやめたのは、健とデートするためだった。デート先のバーで、健は偶然知り合いの将校と出会った。将校は健に、和子のことを恋人かどうかと尋ねると、健はきっぱりと否定してしまう。その

後、成り行き上和子は健と将校と3人で酒を飲み、将校とダンスを踊り、とうとう将校と一夜を共にしてしまう。だが和子にとって、将校との一夜は不本意なものであった。それは、翌日和子がホテルの一室で嫌悪感を浮かべるところからみてとれる。成り行きとはいえ、和子にとって「拒絶」という選択肢も与えられず、デートの相手は健から将校に代わり将校と一夜を共にしたのである。このことから和子は、間接的には健、直接的には将校といった2人のおとこからからだを消費されたといえよう。もっというならば、和子は和子自身気づかない間にレイプを受けたといってもいいだろう。ただ和子のケースがレイプであるという事実を見えにくくしているのは、健と楽しんでいたデートが、和子にとっては予想外の健の裏切りにあい、相手がいつのまにか将校に代わったところにある<sup>21)</sup>。村のひとびとや家族は和子がレイプを受けたとは思っていないので、和子は嫌悪感を内包していくのである。

将校との一夜を境に、和子は制服から流行の服に身をつつみ斜に構えた態度をとりだす。そして両親の期待と裏腹の行動をとることによって、「従順な娘」という家の期待や村の枠組からはみだそうとする。そんな和子は村のおんなたちにとって、軽蔑の対象だったかもしれない。しかしながら先にも触れたように、軽蔑のまなざしの裏には羨望のまなざしがある<sup>22)</sup>。敗戦後、村を復興したとおもえば朝鮮戦争が勃発し、村にRRセンターが移転してきてひとびとの目の前に「西部の街」が突如出現したのである。高校2年の生徒が、「奈良に住でいて、とき折アメリカの植民地のような気がする<sup>23)</sup>」と作文に綴っているほど、当時の「パンパン」たちの存在が、村の子どもから大人まで少なからずインパクトを与えたといえよう。すなわち、「パンパン」の存在は従来の家や村の因習に縛られていたおんなたちにとって、流行の最先端をいく「新しいおんな」として映った側面も見逃せない。とするならば和子の態度は軽蔑や侮蔑の対象である

反面、村のおんなたちの好奇心やあこがれを喚起しているのだ<sup>24)</sup>。和子にとって説明のつかない嫌悪感を断ち切る手段がおしゃれにあるとするならば、和子のこうした自己主張によって、和子は結果的に村のおんなたちを刺激する存在となっていく。

### 3. レイプの波紋 ― 房子の抵抗

村のおんなたちにある種の羨望のまなざしを抱かせるおんなとして、そして隠されたレイプの問題が和子に内包しているとするならば、もうひとつ見落としてはならないこととして、米兵によるあからさまなレイプの問題がある。映画『狂宴』ではこの部分を、和子の隣に住む同じ高校に通う房子という高校生で描いている。房子は修学旅行先の仙台で、米兵にレイプされて傷心で村に戻ってくるという設定である。房子と同じような事件は実際におこなわれ<sup>25)</sup>、軍事基地のあるところでは修学旅行の安全さえ脅かされているという世論の心配を引き起こした。

『狂宴』では、現地調査をしている女子大生たちが要所要所に登場する。米二郎の家を訪問したとき、米二郎が安全保障条約のことを説明すると彼女たちは反論して米二郎を説き伏せようとするところから、女子大生たちは反体制側として描かれている。そんな彼女たちは、房子が米兵にレイプされて自宅へ戻ったあと、房子の家を訪れる。房子の母ミネに彼女たちは、レイプされた房子が泣き寝入りしないように裁判所へ告訴するようにすすめる。彼女たちの熱心なすすめにミネは、「恥のうわぬり」だといって断る。房子の兄の正亀は、「房子のことで、一番苦しんでいるのは親たちなんだ。みんな同情したような顔して腹の中で笑ってるんだ」と女子大生たちにつかみかかる。房子が「傷もの」になってしまったという一家の体裁を気にするミネ、あるいは一家の総領として親を引き合いにだしつつも家の権威を守ることしか念頭にない正亀。両者の間には、レイプで新聞沙汰

になった房子の心情には思い至らないようだ。そして説得しようとした女子大生たちはこんなミネや正亀のもとでは無力である。

当時プロデューサーだった具快萬氏によると、奈良のRRセンター周辺では、基地被害の現地調査を行っていた大学生グループが大勢いたという<sup>26)</sup>。こうした学生たちが告訴をすすめたところで、実際の事件では米軍側は調査さえ行なわなかったのである<sup>27)</sup>。すなわち米軍の治外法権享有に関する条約である行政協定第17条の、米国の軍事裁判所及び当局は、米軍の構成員、軍属、その家族が日本国内で犯すすべての罪について専属的裁判権を日本国内で行使する権利を有するという規定のため、日本側でたとえ犯人がわかっていたとしても、米国側が必ずしも有罪の判決を下すとはかぎらない事態を引き起こすのである<sup>28)</sup>。

このような法制度のシステムに反論する反体制側の表象として描かれた女子大生たちは、結局のところ村社会に影響を及ぼさない「女性の身体<sup>29)</sup>」として登場するのである。またこの情報をキャッチした佐乃は、「うちの和子やのうてよかったようなもんや。遠いところまで楽しみにして、傷もんになって帰って来よったらほんま世話ないわなァ」と従業員のローズたちに言う場面から、レイプされたおんなたちが村でどのような視線を浴びていたか垣間見える。

房子が修学旅行先で米兵にレイプされて入院したあと帰宅する汽車の中で、迎えにきた父亀造に房子は「うち…帰りとうない」と涙ながらにつぶやくが、それは小さな村社会で「傷もの」になって戻ってくることがなにを意味するのか、房子は予想していたからである。房子のそんな態度に返すことばもなく沈黙する亀造。

女子大生たちが房子の家を訪問してから後、あいかわらず房子は縁側に腰をおろしてじっとしている。そこへ祖父の吾作が近づき、「一生のうちに死ぬほどつらいことがあるもんや。それをじーっとがまんしてたら、ま

たええこともあるねん」と房子に慰めのことばをかける。房子は吾作をちらっとみる。その表情は冷たい。吾作は房子をみつめて「どうや、おじいちゃんと一緒に活動でも見に行かんか。アベックで…な。ええやろ。どや、おじいちゃんじゃあかんか」と笑いかける。飛鳥亀造、飛鳥米二郎両家の実質的な権限を握っている吾作の房子を見つめるそのまなざしは、孫娘を見つめるまなざしではなく、もはや処女を失ってしまった「おんな」を見つめる性的な視線である。吾作と視線を合わせようとしめない房子は、吾作の性的な視線を敏感に感じとったのではないだろうか。

性暴力被害は房子のようなケースだけにとどまらず、神崎氏が、「キャンプや駐車場の附近をウロウロしている日本の女は、すべて売春婦とみなされて、MPの指導する警官隊のパンパン狩の対象になった。トラックに投げこんで、病院へ送り、強制検診をうけさせる」と指摘しているように<sup>30)</sup>、いわゆる「ミス・キャッチ」が頻繁に起こった。また、性病にかかった米兵から申立てをうけた日本人の「娼婦」たちは、証拠があるなしにかかわらず、軍事裁判にかけられ、女子刑務所につながれた者がおおかったという<sup>31)</sup>。RRセンター周辺のおんなたちはこのように、いつ自分が房子のような性暴力の「犠牲者」となるかわからない状況に置かれていた。

数日後、房子は池に投身自殺をしてしまう。房子の自殺は、房子を「傷もの」としかみようとしない両親や祖父、兄といった家族に対する怒りではないだろうか。もちろん「傷もの」だとうわさする村のひとびと、そして房子をそんな状況に追いやった直接の原因である米兵およびその背後にある、駐留米軍を保証した日米安保体制や冷戦構造も決して無関係ではない。しかしながら、房子にとっては最後の砦ともいえる家族に房子は否定されたのである。投身自殺は、世間体しか念頭にない家族の表裏をみてしまった房子の、せいいっぱいの抵抗だといえるのではないだろうか。

#### 4. おわりに

映画のラストシーンは房子の葬列を描く。先頭は、米二郎の店が寄贈した喪章をかけた大花輪を掲げた米二郎の高級車。そのあと房子の家族、米二郎一家、女子大生たちや同級生、そして村のひとびとと行列は続く。憔悴しきった房子の家族に対して、米二郎一家は葬式に似つかわしくない派手な服を着て、胸にコサージュをつけている。突然、房子の兄正亀が米二郎につかみかかり、房子の葬式をとりおこなった米二郎を非難し、「房子がかわいそうや、房子がかわいそうや」と言って泣きながら花輪を道路に投げ捨て、米二郎と掴み合いのけんかになる。正亀が米二郎を組み伏せ押さえつけたときにやっと、吾作と女子大生たちが正亀を米二郎から引き離し、なにごともしなかったかのように葬列はすすむ。

正亀は房子が米兵にレイプされ自殺したということで、房子の死をもっともひきうける人物として描かれている。だがこれまでにみてきたように、正亀は房子がレイプされたときには家の権威を守ることしか頭になかった。このような正亀にとって房子の死は、家から自殺者を出してしまったための怒りであり、その怒りをすべて基地賛成派として大儲けをする米二郎一家に帰結しているのではないだろうか。また房子の葬列をひとつのイベントととらえ、米軍基地賛成派の「成功者」であるステイタスとして高級車や流行の服を誇示する米二郎。両者は反目しているようで、映像が描き出したのは房子の不在なのである。こうして家に抵抗して自殺した房子の死は図らずも、房子の葬列を自分のステイタスに利用する米二郎と、房子の死をひきうけているようで家の面子にこだわっている正亀というように、村社会のかかえる問題を露呈した。

葬列であっても和子は流行の服を身にまとい、あいかわらずいつもの態度を変えない。米二郎の演出でイベント化されてしまった房子の葬列に参

列する和子は、村のおんなたちを刺激したにちがいない。それは和子の意図にかかわらず、村社会の秩序にゆさぶりをかける行為でもあるのだ。

村のおんなたちを刺激し続ける和子と、村のおとこ中心社会を暴いた房子。家や村、国家に翻弄されまいとする和子や房子の姿を『狂宴』の中に見出したときから、さまざまなおんなたちの声がかきこえるのである。

## 注

- 1) RRセンターの表記は、Rest & Recreation Center あるいは、Return & Recreation Center という具合にまちまちであるが、本稿では前者を使用する。
- 2) 「R・Rセンター白書(1)」『奈良日日新聞』1953(昭和28)年1月18日付。  
アジア太平洋戦争終結直後に日本政府のバックアップにより、RAA (Recreation and Amusement Association 特殊慰安施設協会) が組織され、奈良市内の新温泉ホテル・あやめ池新温泉や現在の天理市に占領軍専用キャバレーなどが設けられたが、わずか7ヶ月足らずでその組織は活動停止となった。RAAについては別稿で論じる予定である。
- 3) 「R・Rセンター出現」『奈良日日新聞』1952(昭和27)年12月29日付。  
『ならの女性生活史 はなひらく』ならの女性生活史編さん委員会(奈良県)1995年。
- 4) 佐藤公次『占領と平和』(耕文社)1996年294頁。
- 5) 関川秀雄「想出」ビデオ『狂宴』の資料(独立プロ名画保存会)1998年。
- 6) 「解説」ビデオ『狂宴』の資料(独立プロ名画保存会)1998年。
- 7) 1950.06.15(東横)の作品。野村裕介『日本映画データベース』(<http://jmdb.club.ne.jp/>)には関川監督の主要作品が1946.05.02明日を創る人々(東宝)から1969.05.14超高層のあけぼの(日本技術映画)まで年代順にデータが収められている。紙面の都合上、作品名はここでは列挙しない。
- 8) 同上『日本データベース』には、片岡薫主要脚本作品が1953.04.21混血児(蟻プロ)から1961.04.12抵抗の年齢(桜映画)までデータが収められており、片岡薫『片岡薫シナリオ文学選集』全五巻が龍溪書舎から1985年に発行されている。
- 9) 片岡薫「狂宴取材ドキュメント」『片岡薫シナリオ文学選集』5巻(龍溪書舎)1985年179頁。
- 10) 片岡薫前掲書179-180頁。なお片岡氏は当時春秋プロダクション制作主任

西沢周基氏と制作1年前の7月8日から10日間の日程で奈良のRRセンターを調査に訪れている。「R・Rセンター映画出演」『奈良日日新聞』1953（昭和28）年7月9日付。

- 11) 1954（昭和29）年3月3日のこと。『ならの女性生活史 はなひらく』前掲書、141頁年表。関川監督は「想出」としてその当時のエピソードを克明に述べている。関川秀雄「想出」ビデオ『狂宴』の資料（独立プロ名画保存会）1998年。
- 12) 「RRセンター廃止同盟會を結成」『奈良日日新聞』1952（昭和27）年9月4日付。
- 13) 「移轉反對署名運動を展開」『奈良日日新聞』1952（昭和27）年9月21日付。
- 14) 「R・Rセンター白書(5)」『奈良日日新聞』1953（昭和28）年1月22日付。
- 15) 「三笠中RRセンター廃止を陳情」『奈良日日新聞』1952（昭和27）年9月9日付。
- 16) 「文部省等が視察」『奈良日日新聞』1953（昭和28）年1月31日付。
- 17) 「奈良RRセンター移轉へ新布石」『奈良日日新聞』1952（昭和27）年8月21日付。
- 18) 清水幾太郎氏は、「子供たちはパンパンを軽蔑し憎悪する。と同時に、軽蔑や憎悪の蔭には、紛れもない羨望の目が光っている。子供たちは、羨望の理由として、綺麗な洋服が着られる、ブラブラ遊んでいられる、英語が話せる、アメリカ人と一緒に歩ける、などと語っている」と指摘している。清水幾太郎「基地社會の構造」『基地日本』（和光社）昭和28年、217頁。また、埼玉県朝霞基地周辺の幼稚園や保育所にかよう幼児を対象にした調査では、「大きくなったら、なにになりたいか」という質問に、少女全部が、「アメリカのお姉さんのようになりたい」と答えたという（神崎清『戦後日本の売春問題』社会書房1954年57頁）。
- 19) 「社説」『奈良日日新聞』1952（昭和27）年7月29日付。
- 20) 「子供の不良化防止を」『奈良日日新聞』1953（昭和28）年8月1日付。
- 21) レイプがレイプであることを不可視のレベルで考察するのに、古久保さくら「満州における日本人女性の経験——犠牲者の構築」『女性史学』9号女性史総合研究会1999年参照。
- 22) 神崎清氏は、朝鮮戦争時の「外人相手のパンパンの発生」についてその理由を、かならずしも経済的原因に起因するわけではないということを指摘している。神崎清「街娼論」『基地日本』前掲書339頁。
- 23) 「R・Rセンター白書(4)」『奈良日日新聞』1953（昭和28）年1月21日付。
- 24) 山下悦子氏は戦争が終了した時点から「売春防止法」が成立する1957（昭



- 和32)年まで、買売春を貧困、病氣、墜落のイメージを実現させた時期であると主張する。これに対して平井和子氏は、彼女たちの「存在の新しさ」を挙げている。山下悦子「戦後買売春の歴史——性風俗と性意識の変容」鶴見和子監修、山下悦子編『女と男の時空——日本女性史再考Ⅵ』所収(藤原書店)1996年164頁。平井和子『『買売春』の戦後史——占領期の御殿場を中心に』静岡大学修士論文1997年73頁。
- 25) 「仙台で米兵暴行修学旅行の女生徒に」『朝日新聞』1953(昭和28)年7月7日付。
- 26) 1999年8月5日具氏への直接インタビュー。
- 27) 藤目ゆき「冷戦体制形成期の米軍と性暴力」前掲書132頁。
- 28) 治外法権の構造とその機能については、猪股浩三「いわゆる治外法権」『基地日本』前掲書に詳しい。
- 29) 金成禮氏は、「済州島4・3事件」について「アカの身体」を「女性化性欲化した身体」として認識されることを指摘しており、女子大生たちの村でのスタンスとレッドパージ問題と重ね合わせて別稿で論じたい。金成禮「国家暴力と女性体験——済州4・3を中心として——」『済州島シンポジウム報告集』所収(国際シンポジウム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局)1999年。
- 30) 神崎清前掲書342頁。
- 31) 神崎清前掲書。

※本稿では新聞は元号と西暦と両方を表記しているが、書物は奥付どおりに引用している。そのほかは基本的には西暦で表記している。

本論文を執筆するにあたり、資料収集に協力してくださったかたがた、有益な示唆を与えてくださったかたがに謝意を表したい：喜田デシケイラ由美子氏(カリフォルニア大学サンタバーバラ校大学院)、具快萬氏(『狂宴』プロデューサー)、杵井道子氏、西山智子氏、西山雄二氏(一橋大学大学院)、野村裕介氏(日本映画データベース<http://jmdb.club.ne.jp/>)、藤目ゆき氏(大阪外国語大学)、山本洋子氏(独立プロ名画保存会)、山本駿氏(独立プロ名画保存会)、大阪市立大学大学院経済学研究科朴一研究室大学院ゼミのみなさん。

(大学院後期課程学生)